

「結核集団発生の対策に関する自由集会」に参加して

茨城県保健医療部感染症対策課
主任 小松崎 智樹

2023年10月31日から11月2日まで、第82回日本公衆衛生学会が茨城県つくば市で開催され、初日に「結核の集団発生に関する自由集会」が行われました。新型コロナウイルス感染症が5類に位置付けられてから初の開催となり、会場のつくば国際会議場は多数の来場者で賑わいをみせていました。自由集会も、会場に58名、オンラインで301件もの方が参加し、結核研究所長の加藤誠也氏が冒頭の挨拶で「記憶にないレベルの参加者数」と発言されたほどでした。

開会挨拶の後は岐阜保健所の湯浅紀子氏による「高齢者福祉施設における結核集団感染事例」の報告がありました。特別養護老人ホームの入所者が肺結核と診断され、利用フロアに勤務している介護士を中心に接触者健診が実施された事例です。

接触者健診の結果、介護士1名が肺結核と診断されましたが、その介護士は事例発生の前月に行われた職場健診の胸部X線検査の結果で要精査となり、その後、クリニックを受診した際も総合病院での検査を勧められていたにも関わらず、以降の受診を行わず、今回の接触者健診で肺結核と診断されたということでした。さらに、10年以上前に入職時健診があったものの、最終的な結果を本人からの口頭のみで判断したことで、感染の予兆を見逃し、職場での定期健診で2014年以降、毎年要精査が出ていたにも関わらず受診をしなかったことも、今回の集団発生の原因になったようです。

定期健康診断が大切であるとともに、職場の管理者が精密検査結果を確実に把握することが、従業員のみならず、入所者やその家族も含めた方々の健康や生活を守ることに繋がることを再認識しました。

次に、大阪市保健所の森本哲夫氏から「外国生まれの小児を発端とした結核集団感染事例」の報告がありました。入国5年目のネパール国籍の小児が一時帰国

後に発病し、クラスメイトや初診までの期間に行われた修学旅行のバス同乗者が感染したという事例です。

教室内の感染が空気の流れとの因果関係を疑わせる一方で、修学旅行のバス移動では、席が離れており、接触機会も限定される運転手が感染するなど、感染経路の把握の難しさを改めて感じました。

管理者側である学校教員による受診勧告により、さらなる感染拡大を防ぐことに繋がり、また患者の心に傷を残すかもしれない風評においても、学校側が早期の合同検討会や保護者への説明会を開くとともに、生徒への個別相談なども実施するなどの対策が行われたことを知り、患者の周囲の方々の結核への理解と速やかな対策を行うことの重要性を痛感しました。

また、「外国出生の人であれば、例え言語を操ることができても、医療機関への受診に抵抗があるので、周りの配慮や働きかけが必要」という説明は、なるほどと思いました。仮に自分が海外に長期滞在していたとして、咳が毎日続いていても、日常生活に支障がなければ、医療機関への受診は億劫に感じてしまうかもしれません。相手の立場に立って物事を考えることは、改めて重要だと感じました。

今年度から保健医療部に配属になり、結核業務を担当するようになりましたが、自由集会に参加したことで、県外の事例を学ぶことができ、有意義な時間を過ごすことができました。ここで得られた情報や知識を今後の結核対策にも役立てていきたいです。🐼